

建設経済常任委員会行政視察研修報告書

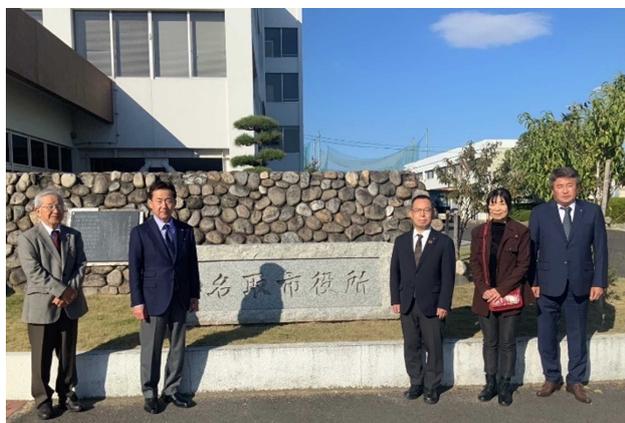
建設経済常任委員会では、令和5年10月30日(月)～11月1日(水)の日程で宮城県名取市、福島県福島市、二本松市、南相馬市を視察して参りました。参加者は小堀 勇人委員長、岡村 浩雅副委員長、角田 憲治委員、若見 孝信委員 加藤 朋子委員、高瀬 一徳委員、執行部職員2名、及び事務局職員1名です。

最初の視察先、名取市では「^{ゆりあげ}閑上かわまちづくり事業及び震災からの復興」について、2日目午前は福島市での「道の駅ふくしま」について、午後は二本松市での「オーガニックビレッジ」について、3日目は南相馬市での「震災からの復興および福島ロボットテストフィールド」についてそれぞれ研修しました。

○宮城県名取市「閑上かわまちづくり事業及び震災からの復興」について

名取市は面積98.17㎢、人口79,690人(R5.9末)、宮城県の南部に位置し太平洋に面しています。北に接する仙台市との境に名取川が流れ、河口部の閑上に閑上港があります。また、東北自動車道、国道4号線、東北新幹線、東北本線が縦貫しています。

2011年(平成23年)3月11日に発生した地震では、市内は震度6強を観測。その後到達した津波は、最大浸水高9.09m、海岸からの最大浸水距離は約5kmにわたりました。965名の尊い命が失われ、特に被害の大きかった閑上地区は再三にわたってテレビ報道され、国民の多くがこの事実を知ったことも記憶に新しいです。閑上地区の復興まちづくりの事業方針としては、閑上東地区は津波が発生した際の危険区域で非居住区域とし、西側の閑上地区を居住区域として土地区画整理事業として行いました。海岸線には国が整備する防波堤を第一次防御ライン、閑上地区中心部を走る市道閑上南北線を第二次防御ライン、さらには西側30haでは嵩上げを行い居住者の安全・安心をハード面で支えています。



名取市閑上地区の復興の象徴ともいえる事業が「かわまちづくり事業」です。

国によるハード事業で堤防側帯、管理用通路、船着き場、多目的広場、階段護岸、親水

広場が整備されました。市としては、(株)かわまちてらす閣上の立上げ支援、民間舟運事業者の公募運行開始に係る支援、まち側側帯の散策路造成工事、各種案内看板設置、各種イベント実施に係る支援等を実施されています。

本来なら河川法の関係で河川敷に商業施設を設置することは難しいですが、「都市・地域再生等利用区域」の指定を目的とした社会実験として河川占有許可を受けられたとのことです。



左：かわまちてらす閣上 右：名取市震災復興伝承館

現在では、このかわまちてらす閣上や震災復興伝承館、近隣にサイクルスポーツセンター、名取トレイルセンター、ゆりあげ港朝市など誘客施設が整備されており、市内で最大の観光エリアとなっています。また、前述の災害に強いまちづくり、かわまちづくり事業を通じて若い世代の移住も後押しし、震災前からは約6,000人、震災直後からは約8,000人の人口増を達成しています。

本市においても、災害に強いまちづくり、氏家ゆうゆうパークや荒川水辺公園などのバージョンアップを図り、さらに魅力あるまちづくりの参考としたい事業でありました。

○福島県福島市「道の駅ふくしま」について

福島市は福島県中通りの北部に位置する市です。福島県の県庁所在地であり、中核市、保健所政令市、中枢中核都市に指定されています。人口277,757人（R4.12）、面積767.72㎢です。

今回訪問した「道の駅ふくしま」は、福島県35か所目、福島市で2か所目の道の駅であり、2022年4月27日にオープンしたばかりの全国でも最新の道の駅です。東北中央自動車道大笹生インターチェンジに隣接しアクセスが非常によいです。また、福島県産の木をふんだんに使った子どもの遊び場「ももR a b iキッズパーク」、EVバイクのレンタルサービス、地元産フルーツが購入できる直売所を備えています。



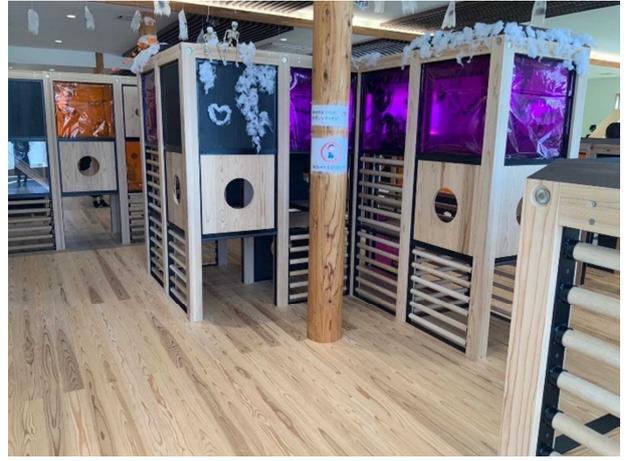
この道の駅の運営は指定管理者が行っており、栃木県宇都宮市に本社を置き、道の駅うつのみやろまんちっく村でも有名な(株)ファーマーズフォレストが受託しています。道の駅運営の実績や道の駅周辺エリアとの観光周遊を提案するなどしたことから高く評価されました。また指定管理期間は10年、指定管理料は0と民間企業のノウハウを積極的に活かせる仕組み作りがなされています。

天井が高く開放感があり充実した品揃えの直売所、特色の異なる店舗が入り様々なメニューが楽しめる食事処、レンタサイクルの貸し出しやドッグランも整備されています。



さらにこの道の駅最大の特徴ともいえるのが、「ももR a b i キッズパーク」(屋内子ども遊び場)の併設です。福島原発事故で放射性物質の飛散の影響で子どもを外で遊ばせることができないとの声を受け、道の駅設置以前から屋内子ども遊び場は設置されていました。その後老朽化により閉園しましたが、その後継として道の駅整備に合わせて現施設が設置されました。屋内の遊び場には珍しい「砂遊び場」、オーストラリア産のホワイトサンドを使用しています。手につきにくく、抗菌作用もあるそうです。館内には木製遊具がずらり、木に触れて感じる木育の場でもあります。

1クール90分の入替え制で運営していますが、土日は行列ができるほどの人気です。



道の駅の運営や周辺観光との連携、子どもの遊び場と道の駅本体と連動させる内容など、本市の道の駅きつれがわにはない取り組みで、大変に参考となりました。

○福島県二本松市「オーガニックビレッジ」について

二本松市は福島県中通り北部に位置する市で「智恵子抄」に詠われた安達太良山と阿武隈川で知られています。人口51,807人（R5.4.1）面積344.42km²で平成17年12月1日に旧二本松市、旧安達町、旧岩代町、旧東和町の1市3町が合併し、現在の二本松市となりました。また、福島県を代表する城下町の一つに数えられ、二本松城は、福島県内の若松城（会津若松）、白河小峰城（白河）と共に、日本100名城にも選定されています。さらに、二本松市は「菊の城下町」と称され、日本最大級の菊人形展「二本松の菊人形」が行われています。

二本松市は、西部の安達太良山麓、東部の阿武隈地域、中央部の平坦地の3地帯に分類され、風水害が比較的少ない穏やかな気候に恵まれ、水稻、^{そさい}野菜、果樹栽培、畜産等の多様な農業が営まれています。

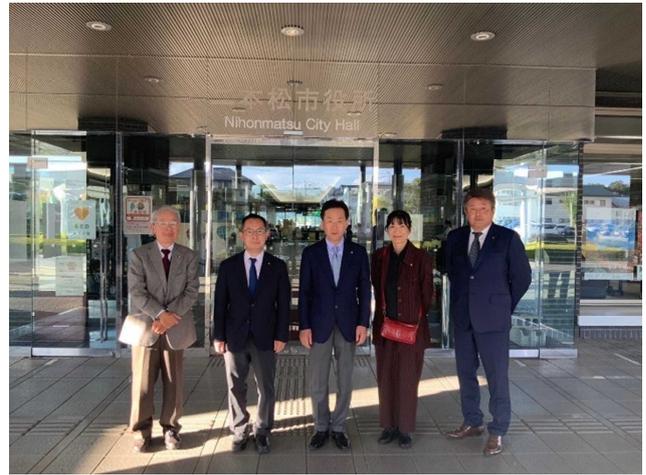
二本松市がオーガニックビレッジ宣言をしたきっかけの一つが、昭和53年に二本松有機農業研究会が設立され、その後各地域で様々な有機農業の取り組みが始まったことです。現在では、6団体30人、25.6haとなっています。

有機農産物の販路については、複数の関連団体が独自の販路を持っているが市内での流通に関しては不十分との説明がありました。また、有機農産物の活用で最も期待されるのは、学校給食への活用です。市民からの要望としても「学校給食への有機農産物の導入」がありましたが、現時点では有機農産物の供給はほとんどない状態です。

まだオーガニックビレッジ宣言をして1年余り、取り組みはまだこれからという印象を受けましたが、「二本松市循環型農業実施計画」で5年後に目指す目標が明確となり、課題や問題点を共有できたという効果が上がっているとのことでした。

有機農産物の生産、供給には様々な問題点があり、安心・安全な農作物をそれなりの値段で販売したい生産者と少しでも安い品物を買いたい消費者とのミスマッチを埋めていかななくてはならないことも実感しました。

今後の本市での有機農産物の生産・供給への問題提起ともいえ、参考になる事業でした。



○福島県南相馬市「震災からの復興、福島ロボットテストフィールド」について

南相馬市は、福島県浜通り北部に位置する市で、人口57,109人（R5.3.31）、面積398.58km²です。毎年7月下旬に開催される相馬野馬追で知られる街でもあります。

東は太平洋に面しており、2011年の東日本大震災では津波および福島第一原子力発電所事故による影響を受け、復興に取り組んでいます。

2006年（平成18年）に、原町市と相馬郡小高町および鹿島町が合併して誕生しました。旧市町の区域ごとに地域自治区となっており、各々「原町区」「小高区」「鹿島区」に移行して住所に名称をほぼ残しています。

2011年3月11日、南相馬市では震度6弱を観測しました。その後到達した津波では遡上高20.8mを記録しています。津波による被害も1,156人もの方が亡くなるなど大きいものでしたが、その後発生した原発事故による影響が現在でも色濃く残っています。

市内小高区が福島第一原発から20km圏内で警戒区域となり、区域内の住民は避難を余儀なくされました。原町区は、原発から20km～30kmの区域に該当し、緊急時避難準備区域に指定されました。一番北にある鹿島区は避難区域外と、せっかく1市2町が合併し南相馬市となったにもかかわらず、旧市町単位で原発事故の対応が分かれるなど対応に非常に困難を極めたとの話がありました。

その後は「小高交流センター」を視察しました。この施設は震災とそれに伴う原発事故でバラバラになった地域コミュニティを再生させるための施設で、この施設に来てから旧知の方に出会うといったこともありました。

国の復興財源が充てられており、室内運動場や子どものための遊戯室、会議室等も備え、クリスマスに向けたイルミネーションも準備されており、地域の皆様が楽しく集える場所を提供しています。



その後は、場所を移動し「福島ロボットテストフィールド」へ。この施設は、東日本大震災、原子力災害によって失われた浜通り地域等の産業回復のために、新たな産業基盤構築を目指す「福島イノベーション・コースト構想」の一環として整備されました。これからの時代の最先端を行くロボット技術の実験場としてこれからの活用が期待できる施設です。現在実験されている研究の半数がドローン関係企業です。そのための研究室の用意され、22室の内16室が入室済みです。



左：説明を聞いている様子 建物の実験用プラント 右：ドローン実験設備

これから自治体でも活用が見込まれるのが、ドローンを使ったインフラ整備、点検業務といったところでしょうか。本市でもドローンの活用を広げ、安全・安心、省コストによりインフラ、施設整備がなされることが望めます。

3日間の研修を通じて感じたことは、ハード面の震災復興はほぼ完了していること。震災や原発事故でバラバラとなった地域コミュニティの再生に取り組んでいるが徐々に効果を上げていること。有機農作物は生産者と消費者のミスマッチを解消しなければ、なかなか進まない事業であることなどを学ばせて頂きました。

今後の本市の市政運営に活かして参ります。